



# LA NOUVELLE

## N°19 AUTOMNE

東京外語仏友会

〒113-0033 東京都文京区本郷 2-14-10

本郷サテライト 東京外語会気付

発行責任者 藤倉洋一 (昭45)

2017.10.1 発行

### 第22回仏友会総会

4月22日(土)恒例の仏友会総会が東京・大手町サンケイプラザで開催された。出席者は、現役学生3名を含めて総勢72名の盛況であった。

藤倉会長の挨拶、金澤副会長の会務報告の後、会計・監査報告が承認された。ここで総会の部は終了し、続いて、川口先生から母校の近況報告をいただいた。

講演会の部では、元仏友会会長の渡辺昌俊氏(昭32)を講師に迎えて、『銀行員の見た日仏関係の変遷』との演題で1時間半ほどお話しいただいた。氏は、3回のパリ勤務を通じ、60年代から80年代にかけて、まさに日仏経済関係の荒波の中で奔走された生き証人と言える。

講演会終了後、出席者一同が2グループに分かれて、記念撮影を行った。現役学生3名は、昨年秋の外語祭のフランス語劇『オペラ座の怪人』出演者代表の皆さん。続く懇親会では、南仏産の赤白ワインのグラスを手に、参加者たちは仏友会伝統の和気藹々の雰囲気の中で会話を楽しんだ。

(幹事 中村日出男 昭49)

### フランス語の機縁

渡辺昌俊(昭32)

自ら選んだ道とは言え、様々の偶然に弄ばれたサラリーマン人生だった。卒業は就職難時代だったが、日本経済は高度成長に向かい、国際化が本格化する時期だった。英米流が主流の金融界で一風変わったフランスを中心に活躍の場を与えられたため期せずして数々の特異な経験を積むことが出来た。

フランスとの関わりは東京銀行30年、仏インドスエズ銀行15年に及んだが、自然にフランス流が身についてしまい、常に右肩上がりを目指す日本ではフランスボケと呼ばれることがあった。フランス語が取り持つ縁で右往左往しながら全力で駆け抜けた銀行員の軌跡を辿ってみたい。

スタートは神戸支店だった。当時の神戸は関西経済の中では斜陽の街だったが、国際性は豊かであった。職場では外国語の学習が奨励されただけでなく、時々店内で行われた英語の試験では先輩たちに頼まれて、いつも複数の回答を用意させられた。入行5年後、首尾よく海外研修生に合格し、行く先は迷いなく



昭和45年卒までの出席者と現役学生

まだ写真でしか知らぬフランスを選んだ。

1962年7月、フランス語の習得には最適と言われたツールには既に10名の日本企業の研修生がいるという理由でディジョンに行かされた。ディジョン大学はフランス語のディプロムを取得するためのドイツ、スペイン、イタリアの学生で溢れ、活気に満ちた若い学生に交じって切磋琢磨した結果、6か月後の最初の試験でディプロム取得。その後、仏銀で業務見習いをしてい

るうちに突然サイゴン支店への転勤が告げられた。当時南ベトナムは独立後10年経っていたにも拘らず、公用語にフランス語を用い、銀行界もフランスが牛耳っていた。政治不安から治安が悪く、瀟洒な東洋の小パリを楽しむ間もなくベトナム戦争が勃発した。結局5年弱、戦時下のサイゴンで生死を共にするとき銀行員生活を送ったが、おかげで危機管理の一端を学び、怖いものなしの度胸が身についた。

平和の日本に戻ると日本の国際化は一段と進み、パリ支店に派遣するフランス語ディーラー養成の噂が流れていた。フランス語とディーリングのどちらが難しいかという議論だったが、フランス語が買われて、32歳でディーリングのタコ部屋に入る羽目となった。

苦節3年、71年はじめ2度目のパリ支店に赴任すると、その半年後にニクソンショックが発生し、それまでの固定相場制が終焉すると共に世の中は変動相場制に移行、為替市場は文字通り海図なき航海となった。おまけに日本円が国際通貨となり取引が急増、唯一の邦銀として円取引の中心になった。一方、その頃のパリは東西冷戦の申し子“ユーロドル”取引の中心地でもあった。ソ連東欧をはじめアラブ、アフリカなどの国際資金はアングロサクソンを嫌いパリ市場に集中したが、日本はその重要な取引相手であったのだ。それに加えて、通貨動乱の70年代

なっています。

そして、このCollioureこそ、20世紀初めにHenri Matisse(1869-1954)やAndré Derain(1880-1954)といった当時の新進気鋭の画家達が、カンヴァスに絵の具を塗りたくったような奔放な筆使いと色鮮やかな描写で画壇に一大センセーションを巻き起こしたFauvisme(“野獣派”という意味)発祥の地なのです。

Matisseが初めてイーゼルを携えてこの地を訪れたのは1905年。35歳の時です。それまでのMatisseは、挫折続きの苦しい時期が長かったと言われていたのですが、前年、後期印象派のPaul SignacとSaint-Tropezで過ごしたことにより、南仏の豊かな光に触れ自信を取り戻したようです。そして、Matisseは友人のDerainとともに、Collioureのコバルト色の海や近くの風景(教会、城塞、舟、プラタナスの並木、瓦屋根の家々など)を次々と奔放な色使いで描きました。特に、港に面したÉglise Notre Dame des Angesの鐘楼(写真)は、二人が共通に描いたテーマとして多くの作品が残されています。Matisseらのこうした鮮烈な色彩実験は、その後の西欧絵画に一つの転機をもたらしました。

その後、Fauvismeの運動は下火に向かいますが、Collioureという地はこの運動で、フランスをはじめ世の中に広く知られることとなり、Picassoや他の著名な画家(DufyやDalíなど)、芸術家(Édith PiafやMaurice Chevalierなど)が次々と訪れ、創作活動などで賑わう町となりました。Matisseの時代にはありませんでしたが、町の中心にあるLes Templiersというレストラン(ホテルも兼営)は、戦後、若い芸術家たちがたむろしたという伝説の店で、中に入るとオーナーが収集した絵画が壁一面を埋め尽くしています。



昭和46年以降の出席者と現役学生

は頻りに国際通貨会議が開催されパリがその舞台になることが多かった。会議の内容をいち早く察知して本店に報告することが求められた。かくして60年代、東洋の神秘的な国にしか過ぎなかった日本は、70年代に入り、円の国際化と共にパリを席捲した日本人観光客に象徴される如く、その存在感を急速に高めたのである。

82年1月、3度目のパリ赴任となったが、フランスは社会党政権下、日仏貿易不均衡が原因で、日仏関係は極度に緊張していた。競争原理に基いて最大の利益を追求する日本流と調和のとれた安定成長を指向するフランス流の議論がかみ合わず、取り敢えず貿易赤字を削減したいフランスは日本からのビデオの輸入通関事務をボワチエの山中で行うことを決めた。当時、在仏日本商工会議所の会頭を兼務していたので、銀行業務はそこのけで日仏関係の是正に奔走した。

80年代、日本の金融市場は自由化が大幅に進み、多くの外銀が急速に業務を拡大させたが、またフランス語の縁で仏インドスエズ銀行で第二のサラリーマン人生が始まった。日仏関係は相変わらずで、個人的には攻守ところを変えて両国間の軋轢解消に微力を尽くしたが、フランスが対日政策を一変させて融和策をとったのはボワチエ事件から10年目の92年である。この年、マーストリヒト条約の締結により、欧州は単一市場になり、モノ、ヒト、カネが自由に国境を行き来することになった。すかさずフランス政府は対日キャンペーン“Le Japon, c'est possible”を打ち上げた。最後が感嘆符か疑問符か覚えていないが、その後現在に至る日仏友好関係の幕開けにつながったことは確かである。自分の中では、62年フランスに上陸して以来続いていたフランス語やフランスとの闘いが一段落したことを強く感じた瞬間であった。

### 南仏の旅～アーティスト達の足跡を辿る (その2：ラングドック・ルシヨン編)

椎名隆一(昭57)

フランス南西部(Sud-Ouest)に位置するミディ・ピレネー(Midi-Pyrénées)あるいはラングドック・ルシヨン(Languedoc-Roussillon)と呼ばれる地方は、プロヴァンスやコート・ダジュールほどは知名度は高くないものの魅力ある都市や村々がいくつもあります。この地域を旅する時はまずToulouseから入ることが便利です。Toulouseは、地中海に注ぐCanal du Midiと、BordeauxまでいたるLa Garonneの結節点となっていて、まさに地中海と大西洋を結ぶ河川路の要衝として栄え今日に至っています。さて、そこからはいろいろな観光地へのアクセスが可能ですが、私が今年の春に辿ったのは地中海に出るルートでした。Toulouse市内にも美しい回廊と中庭が素晴らしいジャコバン修道院(les Jacobins)や、市庁舎(Le Capitole)とその前に広がる広場、ロマネスク風の彫像が沢山展示されているオーギュスタン美術館(Musée des Augustins)など見どころはありますが、ここは半日で切り上げ、電車で70分ほどの町Carcassonneに向かいました。CarcassonneではCitéと呼ばれるローマ時代の要塞跡に築かれた城塞都市の見学や、Canal du Midiのクルージング、そしてラングドックのワイナリー巡りに名物地方料理cassouletを味わうなど楽しい思い出を作ることができました。その後、地中海に面するローマ時代の遺跡で有名なNarbonneを経由して地中海沿いに南下し、スペイン国境に近いPerpignanを訪れました。そこでも、旧市街の散策や、丘の上に立つPalais des Rois de Majorqueからの素晴らしいピレネーの眺望などを満喫しました。

さて、前置きが長くなりましたが、このPerpignanから電車でさらに南に20分ほど行ったところにあるCollioureという港町について少し詳しく触れたいと思います。高台にあるSNCFの駅で降りて、風そよぐ坂道をしばらく歩いて下っていくと、やがて強烈な陽射しが照り返す海が見えてきます。かつて貧しい漁村であったこの風光明媚な土地は、現在は避暑地として、フランス人だけではなく外国の観光客もよく訪れるところと

### 第23回サロン仏友会のお知らせ 《講演とボジョレ・ヌヴォオを楽しむ会》

日時：2017年11月19日(日)午後2時～5時

会場：本郷サテライト 3F・7F

会費：3,000円

《講演》 午後2時～3時20分

講師：久山 なぎさ氏(平7)

虎の門病院 精神科医師

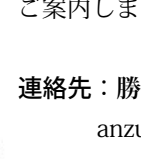
演題：「精神科医師への道と今思うこと」

久山氏は米国生まれ。大学在学中は空手部に所属、黒帯の有段者でもあった。卒業後、東京大学大学院の修士課程を経て、国際関係の仕事に従事することを希望し、ロンドンスクールオブエコノミクスを終了後、ユネスコ(パリ)やILO東京事務所で勤務された。

そんな氏が、精神科医師になるきっかけとは何だったのか、外語卒業生としては異色の経歴を持つ氏のこれまでの人生を振り返っていただくとともに、精神科医師としてどのような経験や仕事を積み、患者と接することでどんなことを考えておられるのかご披露いただきます。

《ワイン・パーティ》 午後3時半～5時

個別通知：10月半ばまでに、メルアド登録の会員にはE-mailで、その他の登録会員には往復はがきでご案内します。申し込みメ切は11月10日。



連絡先：勝亦杏子(昭46)

anzuko@k08.itscom.net

# 《マダガスカル便り》 仏語からもらった豊かさ

高橋 歩 (平 24)

諸先輩方のお洒落な「パリ便り」が続く中で、異例の投稿となり、若干肩身が狭いものの、せつかく頂戴した機会なので、今回は私の経験を通して「仏語圏」とつながる豊かさをご紹介します。

私が大学に入学したのは2008年。今でこそ、外大のアフリカコースは学内外でも認知されるようになったが、当時の入学前説明会では「仏語科でアフリカを学びたいのですが、できますか?」と尋ねると、珍獣を見るような眼差しで眺められたものだった。入学後は、いわゆる「パリ組」の華やかな同級生を横目に、4年間、仏語とアフリカを中心に国際開発や国際関係を広く学んだ。

卒業後、2012年に独立行政法人・国際協力機構(JICA)に総合職として入構した。社会人4か月目には念願叶って初のアフリカ勤務となり、コンゴ民主共和国事務所にて3か月間駐在した。そこで私を待っていたのは「Bonne arrivée」に代表される「仏語圏の仏語」。「フランスの仏語」と甚だしく異なるアクセントや表現に当初は苦戦し、耳が悪くなったのかと自分自身を疑ってしまうくらい、現地の人の仏語が聞き取れなかった。以来、外大で学んできた「仏語」からは垣間見られなかった全く別の



JICA事務所の現地スタッフと共に(左から2人目が筆者)

世界観を、今日に至るまで五感でどっぷり体感している。

現在は、仏語圏の中でも「インド洋アフリカ」と呼ばれるマダガスカル共和国にあるJICA事務所に2014年6月から勤務し、運輸インフラや都市開発など、マダガスカルの経済社会発展に必要な事業を、現地政府と共に考え実行するという仕事をしている。

簡単にマダガスカルをご紹介しますと、インド洋に浮かぶ世界で4番目に大きい島で、国土は日本の面積の1.6倍、人口は約2300万人。公用語はマダガスカル語と仏語で、主食はコメ。一人当たりのコメの消費量は日本人の2倍(年間120kg)で、茶碗2〜3杯はありそうな山盛りのご飯に、親指大のお肉や野菜1片をおかずにするというのが定番で、現地食堂では3000アリアリ(約100円)程で食べられる。大概の日本人は出されたおコメを食べきれず、周囲の失笑を買うことになる。

実は、マダガスカルは意外と私たちの身近な生活とつながり



## マクロン大統領の誕生と今後の展望

渡邊啓貴 (昭 53)

5月、大統領決選投票で66%を獲得したマクロン候補が大統領に就任し、翌月の国民議会選挙でもマクロン大統領率いる中道派「共和国前進(LREM)」が571議席中361議席を得て圧勝した。

＜ポピュリズム隆盛と既成政党離れ＞

一連の選挙の台風の目は国民戦線だった。決選投票にルペンが確実に残れるというのが今回の選挙戦の大前提となっていたからだった。他党はいかにして決選投票に候補者を送り込むのか、という狭い範囲での選択に腐心した。極右勢力躍進によって保守派が動揺し、フィヨン候補が架空雇用金銭スキャンダルで沈む一方で、オランダの人気低迷を加速化で社会党は内部分裂した。こうした間隙を縫って、独立系中道左派のマクロン氏が社会党右派や共和党左派の支持と、中道派MoDem(民主運動)パイル代表の後押しで2月以後急浮上し、短期間に勢いを得て勝利した。

その背景にあった有権者の政治意識は、既成大政党の統治に対する拒否であった。社会・治安・経済問題で袋小路に陥った大政党による政治への不信と反発であった。こうした中で極右・極左が勢力を伸ばしたが、それは苦境の中で一般民衆に人気取り政策を掲げるポピュリズム現象の高揚ともなった。その意味では決選投票に残ったルペンとマクロンの2人は新しい風を起こしたと言えた。

しかしフランス国民が選んだのはルペンではなく、マクロンという39歳の国際的には無名の青年政治家だった。それはフラ



ンス国民が、排外主義・ナショナリストの政権を拒否したことを意味する。

＜社会党保守派を基盤とするマクロン派の苦衷＞

それではマクロン新党とはどんな政治勢力だろうか。マクロン自身が社会党所属の経験があり、大統領選挙でも陰に陽にオランダ前大統領のサポートがあったと考えられる。大統領再選の意欲が強かった同氏が党内で孤立し、そうした中でお気に入りのマクロンの陰の立役者になったという「オランダ陰謀説」も大統領選挙キャンペーン中、一部では流れた。マクロン周辺には社会党の大統領候補ナンバーワンと言われつつ、婦女暴行スキャンダルで失墜したシュトラスカール前IMF専務理事のブレインがかなりいる。LREMは中道寄りの「新社会党」だ。議会選挙でのマクロン派の支持基盤は前回の社会党の支持基盤と大きく重なっている。

＜政策と政局運営＞

マクロン政権の優先政策としては、架空雇用疑惑が選挙戦を通して話題となったので、公職の倫理向上が急務だった。それは、①国会議員の公費による家族採用を禁止、②議員の新規コンサルタント兼務の禁止 という妥協的な形で成立した。

国内政策としては、厚い社会保障政策が特徴であり、この面では社会党と同じである。他方で経済政策はネオリベリズムで減税・投資増を基調とするが、実際にはすでに社会保険引き下げと引き換えに一般社会税(CSG)の引き上げを進めている。財政赤字3%以内を達成するために、公約の不動産税廃止や富裕税削減は当面見送り(社会保険引き下げは来年度以後)、低所得者層の住宅補助減額などの国民には不評な方針を決めた。

7月半ばに国防予算削減に反対したドビリエ統合参謀総長を辞任に追い込んだ、マクロン大統領の強引なやり方には批判が大

が深い。例えば、お菓子。日本で使われているバニラの大半はマダガスカル産、そして、かの有名なVALRHONAを始めとする多くのショコラティエは、当地で生産される希少価値の高いカカオを愛用している。食品以外にも、HERMESのスカーフの縁は器用なマダガスカル人によって手作業で縫製されており、希少価値の高い天然資源と豊富な労働力は、私たちの生活を知らず知らずの内に支えてくれている。

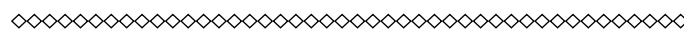
周囲からは「途上国、しかもアフリカなんかによく住めるね」と言われることが多いが、当の本人は苦痛だと思ったためしがない。現地の人々には、生活が苦しくても力強く生きるたくましさがある。嫌な顔一つせず日本人と一所懸命協働してくれる熱意がある。そして何より、他人との繋がりを大切にする人間としての豊かさに溢れている。これらこそが私が働く原動力であり、マダガスカルを始めとするアフリカを愛してやまない理由でもある。電気や水が十分になくとも、精神的に「満たされている」と感じられるのだ。

今回のタイトル「仏語からもらった豊かさ」というのは、フランスの文化や価値観の豊かさのみならず、「仏語圏」全体の人々が有する幅広く多様な文化や価値観を示している。ヨーロッパやアフリカ、北米、カリブなど、仏語を話せる者同士が相互に共有できる価値があり、それを認め合うことで人間としての豊かさも高まっていく。それこそが言語を学ぶ恩恵と豊かさではないだろうか。

きくなり、このころから支持率は急落、8月上旬の世論調査では36%になった。これは最低と言われたオランダの大統領就任後の同期の支持率より10%低い。国民への説明不足が大きな原因といわれている。

最大の課題はフランスの長年の懸案である労働市場の自由化である。企業主が解雇をしやすくし、また労使間の交渉を企業別に実施することができるのか。手厚い社会保障制度に守られてきた仏労働者との妥協は可能なのか。マクロン政権は早速労使交渉の「秋の陣」を迎えることになろう。筆者は当初より、マクロン政権がオランダと同様の増税政権となり、国民の離反を招いていくのではないかと懸念してきたが、不安は募る一方である。

(5月20日、外語大本郷サテライトで、渡邊先生による「仏大統領選挙の回顧と今後の世界の展望」と題する特別講演会を開催し、約50名の出席者がありました。本稿は、その後の動向につき執筆をお願いしたものです。)



## 仏友会会計報告

(2016年4月1日～2017年3月31日、単位:円)

取 入		支 出	
前年度繰越金	749,961		
2016年総会会費	294,500	2015総会費用	322,861
受取通信費	251,000	「LA NOUVELLE」発行費用	120,643
サロン仏友会会費	183,500	サロン仏友会費用	174,009
		大学語劇お祝い金	30,000
		ゆうちょ銀行振替手数料	9,100
通常貯金利息	57	雑費	1,393
合計	1,479,018	合計	658,006
次年度繰越金	821,012		

## 昔日の青春 佛友會々報 80年のタイムカプセルを開ける 14

坂井英俊 (昭 40)

今回は昭和3年卒玉川一郎氏(時事通信出版局勤務)の手記から始めたい。

＜去年(大正12)の関東大震災で焼け落ちた一ツ橋には、3尺幅くらいの板が二三枚かけ渡してあった。そこを渡って願書用紙を貰いに行ったら、仮校舎は市ヶ谷の士官学校(のちの東京裁判や三島由紀夫事件の現場)だと言われ、神保町まで歩いたが、如水会館と商大(現一ツ橋大)以外は何もない焼け野ヶ原がつづき、防空壕同様のヤケトタンの家があり、ボール紙に「スイトン五銭、ライスカレー八銭」と書いてあったのを覚えている。入学試験は本部にあった第一高等学校つまり「一高」だが、一週間ばかり前におこちた学校へ又、別の学校の試験を受けに行くのが変な気持ちであった。はげっちょろけのピンクの校舎・フランス人の教師が何か言ったとき暁星や陸士中退の(外語以前から仏語の初歩教育を受けていた)B組が笑ふと、多分おかしことを言ったのだらうと思って、我々A組も笑ったものだった。＞

昭和18年卒の吉永耕造氏は破天荒なワンパクジョークを弄ぶ。これは戦時中の青年に流行した「バンカラ美学」の「しぶき」でもあろうし、75年も昔のご本人が公開を望んでの手記であるから、そのままを史料としてお伝える。＜称賛やら悪口やら、お気にさほりましたらご海容のほどを。そのころ邦人教授陣はいずれもスカッとした紳士揃いで理知的な皮肉屋ばっかり。

そして人のいい永井さん、話好きで話し出すと限りがなく、我々は先生の漫談を楽しんだものだ。増田先生は酒がお好きで、よく銀座の亀谷におられたとか。又エット氏の痰が咽喉にからんだような発音は分かりにくくて弱った。熱のない授業をエスケイプして、クラス全部で裏山で唄をうたったときもあったっけ。ボネ嬢、彼女は何歳ぐらひだったのか、あれでmademoiselleと呼ぶのには苦勞した。ついmadameと言って怒られた。「そんならオッパイ見せろ」と言ったらmal élève(ママ)といはれた。上級生がフランス敗れた時(1940.6.14 ナチスのパリ無血入城を指すか)の感想をきいたら、声を上げて泣いたといふ。のちに戦時中、はかなく軽井沢で昇天したとか、アーメン。僕がもっと金を儲けたら当時の諸先生とクラス全員をドエライ所でコッテリ飲ませて食はせてあげるのだが、みなさんののしみにお待ちください、その日まで＞

無神経な甘えそのものであるが、ユーモアをかこちながらも、よじれたもの悲しさが行間に漂う。軍国教育のせいか儒教の教えか、当時は「質実剛健、男女七歳にして席を同じうせず」が国家通念、村の鎮守さまの裏で女学生と逢っていただけの生徒がたちまち停学処分になったという。儒教も仏教も、なんと不自然な「女性観」を子弟に吹き込んだものか、恋した相手への態度はことさらにぎこちなく、異様に照れていた。照れたはずみにモラルも恥もガサツに踏み抜く。「ボネ先生が本当は好きだからいじめた、お詫びに金を儲けてドエライ所で飲ませ、馳走してやりたい」これが「つぐない」の言葉らしいが、突発的・家族的な無礼癖は、アメリカの新大統領に似ている。根底には恐らく西洋文化への執念のような

憧れ、その裏返しの幕末以来の攘夷的感覚、そして明日をも知れぬ祖国の命運への期待や不安、これらが慢性的に滞留し心を圧迫していたのでもあろうか。当時は日本の敵でも味方でもなかったフランスの、お気の毒なボネ先生。先輩の甘え・無礼を、いま75年後の超後輩が土下座してお詫びしたい思いです。漱石「坊ちゃん」に出てくる「赤シャツ」のような?垢ぬけた洋風紳士の先生方、ガリ勉で野人のように無神経な生徒たち、これが戦時中一般の学園風景だったのだろうか。＜授業をエスケイプして裏山で唄を唄った＞ともある。当時の外語では師弟そろっての野外散策授業が多かったよしで、他にも靖国神社や目黒行人坂での微笑ましい師弟の心の交流を伝えた美しい小文が寄せられている。

昭和9年の大川彦一郎氏は、新たに赴任してこられた滝川立太郎先生の様子を述べる。＜「私は苗字が滝川、名前は立太郎。いいかね、みなすぐ覚えて」と言い終えられて私たち三十人をぐるりとご覧なされた先生の瞳には、これから四年間手を取って育て上げようとする愛児に向かはれるやうな親しみの情がわき溢れていた」と、恩師への美しい敬愛を寄せている。かと思えば、昭和10年、斎藤正直氏。＜こんなつまらない「記録」を読む者は居ないだらう。読んでもらへないようなものなら最初からよしまへだ。だが待てよ俺は一体何の為にこれを書いて居るんだっけ、さうさう、こいつは大勢の人に読んでもらふ為ではなかったのだ。後の世で古い記録を調べやうといふやうな僕に似た殊勝な者一さうだ確かに殊勝な者に読ませる為なのだ。はい75年後の「殊勝な後輩」が、いま受け止めています。(次回へつづく)